

初級日本語クラスにおけるメタ言語表現の指導と学習

李 婷

要 旨

本研究は、初級日本語クラスにメタ言語表現を取り入れる可能性について検討するために、3クラスで参与観察して、教師の指導と学習者の学習を考察したものであり、以下の結果が得られた。①3クラスから、メタ言語表現が7種類、全115例（異なり数）観察された。②メタ言語表現を取り入れた教室活動は、「ゲスト・セッション」「個人化作文」「チャンピオンのスピーチ」「ショート・スピーチ」である。③教師は、待遇コミュニケーション教育の一環として、意識的にメタ言語表現を初級クラスに取り入れ、導入のタイミング、学習者の使用意識の養成と産出のサポートで様々な工夫をしていた。④学習者は、文脈と母語の感覚を手がかりに、メタ言語表現を理解し、教師のサポートで使えるようになり、学習困難は観察されなかった。直接に指導を受けなかった学習者も、メタ言語表現についての思考と意識化が促され、学習者間で助け合いながら、使用の定着を示している。

キーワード

初級日本語教育 メタ言語表現 教室活動 導入と指導 学習と使用

1. はじめに

メタ言語表現とは、文章・談話において、「自分あるいは他者の言ったこと、これから言うことに言及する表現」（西條 1999：14）であり、日本語教育における重要性が以前より認識されている。日本語学習者は意見を述べる際に、口頭発表でメタ言語表現を使用できないことで、相手に理解の負担をかけたり、時には、相手を不愉快にさせたりするなどの報告（古別府 1994、大塚 2002、藤家 2004）がある。こうした問題意識によって、メタ言語表現は、言語技術の一種として、中・上級の日本語教育に取り入れられ、ディスカッションやディベートなどの教室活動でトレーニングされるようになった。しかし、筆者は以下のような疑問点を抱いている。

〈疑問点1〉メタ言語表現の使用問題は、一般的に中上級レベルで顕在化し、問題視されるが、初級での学習は必要ないのか。

〈疑問点2〉中上級の問題点を究明し、そこで対策を出すのもよいが、その問題にならないよう、初級でできることはないのか。

〈疑問点3〉これまでの先行研究は、公的なあいさつやディベート、テレビ討論、研究発表などの場面に焦点を当てたため、メタ言語表現はアカデミックで難しいというイメージが持たれているが、そうではなく、より簡単に日常的な表現ではないのか。

〈疑問点4〉メタ言語表現は話術や言語技術としてトレーニングされがちだが、単なる表現リストの提供と討論の場における練習だけだと、日常的なコミュニケーションの場における自発的な使用に繋がられないのではないのか。

日常生活においては、「ちょっとご相談があるのですが」、「～と言ったら、失礼ですけども」、「じゃあ、約束ね。」などというメタ言語表現がしばしば観察される。杉戸(2008:11)も、メタ言語表現について、「それほど特別の言語活動を意味するわけではない。普段の暮らしの中で、授業時間を含む様々な学校生活の中で、ごく普通に言ったり書いたり、見聞きしたりするものである。例えば、『では、朝のあいさつをします。』『これから〇〇グループが発表します。』『最初に質問をして、そのあと続けて意見を言います。』などが実例である。」と論じられている。従って、こうした普段の暮らしの中でごく普通に使われ、それほど難しくなく、且つ必要なメタ言語表現は、初級段階から日本語教育に取り入れる必要性と可能性があるのではないかと考えた。しかし、管見の限り、初級段階におけるメタ言語表現の教育にはいまだに触れられていない。以上のことから、筆者はメタ言語表現を意識的に取り入れた初級日本語クラスの参与観察に入り、その実態を究明することで、初級段階におけるメタ言語表現の扱い方とその意義を考え、日本語教育への提言をしたい。

2. 先行研究

日本語教育の観点からメタ言語表現を取り入れた研究は、古別府(1993、1994)、西條(1996、1999)、大塚(2002)、藤家(2004)、関口(2005、2006)、金城・玉城・中西(2007)などがある。

古別府(1993、1994)は、まず、研究報告場面におけるメタ言語表現を「主題化」「論点化」「行動表示」「注釈」「ことわり」「接触」「儀礼」と分類している。そして、日本人(談話研究の研究者)5名と留学生(上級)9名のメタ言語表現の使用状況を比較し、留学生の使用上における問題点を指摘した。さらに、留学生のための口頭発表場面におけるメタ言語表現の教材を作るために、メタ言語表現の構成要素のリストを作っている。

西條(1996、1999)は、討論場面を取り上げ、メタ言語表現を「話題の提示」「焦点化」「総括」「サブポイント提示」「補正」「表現の検索」「宣言」と分類している。そして、シンガポール国立大学日本研究科の3年生(中級)20名を対象に、学習者の聴解におけるメタ言語表現の有用性を検証している。また、同大学研究科2年生で特進クラスの学習者(中・上級)9名を対象に、接触場面における学習者方略について検討し、メタ言語的方略の訓練効果を検証している。さらに、同大学研究科の3年生(中級)8名を対象に、学習者の作文推敲における教師のフィードバックとメタ言語表現の役割について考察している。

大塚(2002)は中・上級の日本語学習者の発話能力を高めるための練習の一つとして、

ディベート活動を行い、学習者の使用したメタ言語表現の実態を明らかにしている。藤家(2004)はよりよい口頭発表の指導の方策を探るために、担当するクラスの口頭発表を考察し、メタ言語表現の使用上における問題点を指摘し、指導に関する方策を述べている。関口(2005、2006)は、留学生(学部1年生)を対象に、専門科目の講義がよりよく理解できるようになるために、アジャクント・クラスを設け、メタ言語表現に着眼した効果的なスキル学習を行った。金城・玉城・中西(2007)は、日本語運用能力が高く、回りの日本人とよい対人関係を築いていると見なされる日本語非母語話者(超級)1名を対象に、そのメタ言語表現の使用実態を明らかにしている。

以上の研究は、多様な角度からメタ言語表現を日本語教育に取り入れて進められている。こうした一連の研究によって、談話理解と談話展開におけるメタ言語表現の有用性が検証され、その使用は伝達能力と対人関係の向上に繋がることが証明された。一方、日本語学習者の使用上における問題点が指摘され、日本語教育におけるメタ言語表現の重要性も注目されるようになった。そして、中・上級日本語学習者を対象に、ディベートや口頭発表のような高度な日本語力が必要とされる教室活動でメタ言語表現を練習するなど、様々な教育実践が行われている。しかし、先行研究のすべてが中・上級レベルの学習者を対象にしたものであり、初級レベルの学習者を対象とした研究は、管見の及ぶ限り見当たらない。

3. 研究目的と研究方法

メタ言語表現が意識的に取り入れられている初級クラスをフィールドに、以下の4点をリサーチクエストンとして、初級クラスで観察されたメタ言語表現、メタ言語表現を取り入れた教室活動、教師の導入と指導、学習者の学習と使用を考察したい。

- ① この初級クラスで、どのようなメタ言語表現が観察されたのか。
- ② これらのメタ言語表現は、どのような教室活動で取り入れられているのか。
- ③ 教師はメタ言語表現をどのように導入し、指導しているのか。
- ④ 学習者はメタ言語表現をどのように学習し、使用しているのか。

以上の研究目的のためには、筆者は授業の参与観察を行い、記録に基づいて、記述分析を行った。調査の詳細については、以下の通りである。

フィールドは、東京都内にある某私立大学で設置された「総合日本語(集中)1-2」(以後「集中」と略す)というクラスで、一学期15週間で『みんなの日本語』I・IIを終わらせる初級の集中コースである。90分の授業は週に10コマ、計15時間あり、日本語教師5名によるチームティーチングで行われている。

参与観察は2011年春学期(2011年5月~2011年8月)、2011年秋学期(2011年9月~2012年1月)、2012年秋学期(2012年9月~2013年1月)の3学期にわたり、筆者が学習をサポートするボランティアとして、1名の教師による3クラスで、授業(合計84コマ・126時間)の参与観察を行い、ICレコーダーとフィールドノートで記録した。また、必要に応じ、授業の休憩時間を利用して、個別の学習者に対するショート・インタビューも行った。

学習者は3クラスとも多国籍で、各学部の学部生、各研究科の大学院生、別科日本語専修課程の学生、および、中国の某企業の委託による企業研修生からなっており、各クラスの学習者数は15名、18名、17名である。日本語のレベルに関しては、学習者のほとんどがゼロ初級レベルであり、中には、当該大学の日本語レベルを判定するプレイメントテスト(1レベルから8レベルまで)で1レベルか2レベルの該当者も2、3名ほどいる。従って、本調査では、学習者のレベルを初級段階と見なすことにする。

4. 初級クラスで観察されたメタ言語表現

日常的なコミュニケーションにおいてなんらかの言語行動を行う際に、【表1】における表現例のように、自分や相手、他者がこれまでに行った・現在行っている・これから行うとする言語行動や言語表現に言及することがある。

表1 メタ言語表現の例

	これまでに行った言語行動	現在行っている言語行動	これから行う言語行動
自分	簡単にご紹介いたしました。	～と言ったらあれなんだけど、	大変申し上げにくいのですが、
相手	先ほどおっしゃったように、	と言いますと？	要件を話してもらいます。
他者	あの子、よく言ってたわ。	話ずれてきてるなあ。	～さんがお話になります。

これらの表現は言及する対象が、一般的な行動や一般的な物事ではなく、言語行動や言語表現そのものであるため、言及される言語行動や言語表現より次元の高い言語表現とされ、メタ言語表現と名付けられたわけである。本研究では、言語表現(A)の言及する対象が言語行動や言語表現(B)である場合、言語表現(A)を「メタ言語表現」と呼ぶこととする。例えば、言語表現(A)「質問です。」は、後の質問という言語行動(B)に言及しているため、メタ言語表現である。



図1 メタ言語表現の仕組み

言語表現によって言及される対象が言語行動や言語表現であるかどうかというのは、メタ言語表現を判断する最も根本的な基準となる。従って、「言う」「説明する」「お願い」「紹介」のような言語行動を表す動詞や名詞の有無が有力な手がかりとなる。

以上の定義と認定基準により、3クラスでメタ言語表現を7種類、115例(異なり数)観察されている。古別府(1993, 1994)と西條(1999)の分類を踏まえ、観察されたメタ言語表現をまとめると、【表2】¹のようになる。

表2 初級日本語クラスで観察されたメタ言語表現

	種類	用 例
①	話題提示	これからハッピーの話です。/スピーチのトピックは～です。/もう一つ。/もう一つ質問がありますけど、/最後の質問です。/質問があります。
②	予 告	これから発表します。/これから、私のスピーチをします。/一つだけ例をあげると、/今日は、ジョリンさんはスピーチを発表します。
① +	話題提示	これから30万円あったらしたいことについて発表します。/9球について説明すると、/最後に、私がかんらず行きたいところを紹介しします。/これから私たちの動詞を発表します。/今日はトムさんが剣道についてお話になります。
②	予 告	
③	サブポイント提示	まず、次に、最後に、/第一は、つぎは、第三は、最後に、/まず、最初に紹介するのは泊まることです。
④	補 正	失礼ですが、/司会が質問して失礼ですが、/この質問は because your name is 久美子。
⑤	終了表示	今日は、私の夢についてお話しました。/以上、私の生活です。/以上です。/私のスピーチは終わります。/質問ないようですから、本日のスピーチは終わります。
⑥	自他発話評価	いい質問ですね。/難しい質問ですね。
⑦	他者発話への働きかけ	すみませんが、自己紹介をお願いします。/もう一度、お願いします。/お名前を教えてくださいませんか。/ご質問をお願いします。/○○さんに質問どうぞ。

①「話題提示」は西條（1999：22）の定義「話題として取り上げることを表す表現」に従う。「これからハッピーの話です。」のような話題の内容、「もう一つ。」のような話題の数、「質問があります。」のような話題の種類と存在を提示するメタ言語表現が観察された。

②「予告」というのは、西條（1999:14）の「宣言」よりも広い概念である。「宣言」とは「これからすることを宣言する表現」と定義されるが、誰が誰のこれからすることを宣言するのかが明示されていない。「これから、私のスピーチをします。」や「これから私たちの動詞²を発表します。」は、自分、または、自分を含めた集団のこれから行おうとする言語行動を明言する最も典型的な「宣言」となっている。しかし、「ジョリンさんはスピーチを発表します。」のように、他者のこれから行う言語行動を明言する場合もある。その場合は、他者の行為に対する「決定権」を持っていないことで、「宣言」と呼ぶのは若干無理がある。従って、自分と他者の両方が含まれる「予告」と名付け、「自分や他者のこれから行う言語行動を宣言し、予告する表現」と定義し直した。もう一つ留意すべきところは、西條（1999）の定義における「これからすること」という部分が厳密性に欠けているということである。なぜかという、この定義のままだと、「お先に帰ります。」のような一般的な行動、すなわち、「これからすること」を宣言するメタ言語表現でない表現まで、定義に当てはまってしまうことになるからである。したがって、本研究の定義は、「これからすること」ではなく、「これから行う言語行動」と制限をかけたわけである。そして、①「話題提示」と②「予告」の組み合わせも多く観察されたため、「話題提示+予告」の欄も設けた。勿論、これも「一番有名な道具を紹介します。」のような自分の言語行動を宣言し、話題を提示するパターンも、「今日はトムさんが剣道についてお話になります。」のような他者の言語行動を予告し、話題を提示するパターンもある。

③「サブポイント提示」と④「補正」は、西條（1999）の定義をそのまま援用する。「サブポイント提示」とは「これから言うことの項目を示す表現」（西條 1999）と定義されている。本調査で観察されたメタ言語表現の中には、「まず、次に、最後に、」「第一は、つぎは、第三は、最後に、」のような典型的な「サブポイント提示」もあれば、「まず、最初に紹介するのは泊まる場所です。」のような、「サブポイント提示」と「予告」と「話題提示」の機能を同時に果たすものもある。「補正」とは、「自分が言及した、あるいは言及することに付言して、相手への配慮を示す表現」（西條 1999）と定義されている。「司会が質問して失礼ですが、」のようにこれから行う言語行動に付言する場合も、「この質問は because your name is 久美子。」³のようにすでに行った言語行動に付言する場合も観察された。

さらに、西條（1999）にはない⑤「終了表示」、⑥「自他発話評価」と⑦「他者発話への働きかけ」を新たに設けた。「終了表示」とは、自分や他者がこれまで行った言語行動の終了を告げる表現である。本調査では、「私の発表は以上です。」のように、自分の言語行動の終了を告げたり、「質問がないようですから、本日のスピーチは終わります。」のように、司会者が発表者の言語行動の終了を告げたりするメタ言語表現が多々観察されている。「自他発話評価」とは、自分や相手、他者の行った言語行動や発話を評価する表現である。本調査では、「いい質問ですね。」のような、他者発話を評価するメタ言語表現が観察された。「他者発話への働きかけ」とは、相手や他者を含む他者の発話や言語行動を始めさせたり、促したり、続けさせたり、止めたりする働きかけを持つ表現である。本調査では、「もう一度、お願いします。」「お名前を覚えていただけませんか。」など相手の発話や言語行動を始めさせるメタ言語表現が多く観察された。⑤と⑦は「文脈展開機能」⁴（佐久間 2002：166）を参考にした分類で、詳しくは同書をご参照いただきたい。

なお、西條（1999）の分類にある「他者発話焦点化」「自己発話焦点化」「主張型総括」「評価型総括」「前触れ型総括」と典型的な「表現の検索」は、今回の調査で観察されなかった。以上、初級日本語クラスでありながらも、7種、全115例（異なり数）のメタ言語表現が観察された。これらのメタ言語表現は、どのような教室活動で観察されたのか、具体的にどのような文脈において、どのように使用されているのかについては、5で考察する。

5. メタ言語表現を取り入れた教室活動

メタ言語表現の使用が観察された教室活動は、主にA「ゲスト・セッション」、B「個人化作文」とその口頭発表、C「チャンピオンのスピーチ」、D「ショート・スピーチ」の進行、発表と質疑応答である。異なり数で統計すると、それぞれ15例、4例、7例、84例のメタ言語表現が観察されている。なお、特別の教室活動ではなく、「（先生、）質問です。」「（先生、）文法について。」など5例ほど使用されている。

5.1 「ゲスト・セッション」

「集中」では、不定期ながら頻繁に「ゲスト・セッション」という教室活動がある。ゲストは、自己紹介するのではなく、学習者からの質問に答える。この教室活動では、初対

面の会話における丁寧な話し方が訓練され、メタ言語表現や敬語の使用、質問する前の名乗り、相手の名前のリピートと確認、答えに対するお礼などの指導が見られる。

表3 「ゲスト・セッション」で観察されたメタ言語表現

【資料1】 クラスⅠ 2011年06月29日 第9週
S105 ⁵ : こんにちは。トルクメニスタンから参りましたケミルと申します。 <u>失礼ですが</u> 、お名前は？ G101: ディオレと申します。
【資料2】 クラスⅡ 2011年11月16日 第8週
S213: お仕事は何をしていらっしゃいますか。 G201: 会社員です。 S213: あっ、 <u>すみません</u> 、もう一つ。 G201: はい。 S213: 今日はなぜわざわざ群馬県からいらっしゃいましたか。
【資料3】 クラスⅢ 2012年11月21日 第9週
S312: お化粧品は好きですか。 G301: (笑) お化粧品したら、きれいになる、きれいになりますから、はい、必ず毎日します。好きです。 S312: ええと、 <u>この、この質問は because your name is 久美子</u> 。あ、すみません。 G301: いいえ、ありがとう。

【資料1】は、ゲストの名前を尋ねる際に、「失礼ですが、」というメタ言語表現で礼儀を示す例である。【資料2】は、「すみません、」と礼儀を示してから、もう一つの質問があることを提示し、二つ目の質問に入る例である。【資料3】は、男性の学習者が女性のゲストに、化粧が好きかどうかというやや立ち入った質問をした後で、「この質問は because your name is 久美子。」というメタ言語表現で、正しい日本語の表現はまだできていないが、質問した動機を明らかにすることで誤解を防ぎ、許しを求め、補正をする例である。【資料3】はやや特殊性だが、【資料1】と【資料2】に似たようなメタ言語表現の使用は、他のクラスのゲスト・セッションでも観察され、3クラスに共通している。

5.2 「個人化作文」とその口頭発表

「集中」では、新しい学習項目が導入された後、それが自然に使われる文脈で「個人化作文」を学習者に書かせるのが恒例となっている。川口(2005)によれば、「個人化作文」というのは、文法項目の学習をそのまま自己表現に繋げ、自己開示と他者理解を促進するために、学習者個人の感情・経験・思想を表現させるための教室活動のことである。従って、「個人化作文」は文法項目と表現教育を結びつけた教育活動であり、メタ言語表現のためにデザインされているわけではない。学習者の書く「個人化作文」は、口頭で発表するなり、黒板に書くなりして、クラスで共有できるようになっている。口頭で発表する場合に、【表4】のようなメタ言語表現の使用が見られた。

表4 「個人化作文」で観察されたメタ言語表現

【資料4】 クラスⅠ 2011年06月15日 第7週
これから、「30万円あったらしたいこと」について発表します。……
【資料5】 クラスⅡ 2011年10月26日 第5週
これから私の作文を発表します。……。以上です。
【資料6】 クラスⅢ 2012年12月05日 第11週
風邪を引いた時、お風呂に入った方がいいです。どうしてかという、サウナに入ると、気持ちがよくなるからです。

【資料4】【資料5】は、「個人化作文」を口頭発表する際に使用された例で、これから発表するという言語行動の予告をすると同時に、何についての発表なのかという話題も提示している。また、言語行動の終了を示すメタ言語表現の「以上です。」の使用も見られた。【資料6】は、文型の「～た方がいい/ない方がいい」とメタ言語表現の「どうしてかという、」を組み合わせ導入された後で、「(私の国では) 風邪を引いた時、～た(しない)方がいいです。どうしてかという、～」という文脈で、学習者に書かせた「個人化作文」である。「どうしてかという、」は、前の話を受けて疑問を投げかけることによって、聞き手の思考を促した上で、後の解釈や説明へと展開する定型表現である。

5.3 「チャンピオンのスピーチ」

「集中」では、前回の授業で行った漢字や文法のテストの最高得点者が「チャンピオン」と呼ばれ、クラスの皆の前でスピーチをする活動が行われている。チャンピオンのほかに、司会、メダルのプレゼンターの役も学習者に与えられ、他の学習者は聴衆として、チャンピオンに質問をする。この教室活動は、改まった場面での話し方、敬語などを実践する場であり、メタ言語表現の使用も観察された。

表5 「チャンピオンのスピーチ」で観察されたメタ言語表現

【資料7】 クラスⅠ・Ⅱ・Ⅲ 3クラス共通
① ○○さんにスピーチをお願いします。
② 質問ないようですから、本日のスピーチは終わります。
【資料8】 クラスⅡ 2011年11月16日 第8週
昨日のチャンピオンを発表します。
【資料9】 クラスⅡ 2012年01月11日 第13週
すみません、質問があります。

【資料7】は、3クラスに共通する司会の進行をするメタ言語表現である。司会者とチャンピオンのスピーチの表現が参考資料として学習者に配られている。2週間ごとに敬語表現がレベルアップされていく表現の中では、これらのメタ言語表現も取り入れられている。【資料8】は、配布資料にはない表現であるが、司会の学習者が自発的で、即興的に使用したメタ言語表現で、これから行う言語行動を宣言、予告する例である。【資料9】は、

聴衆としての学習者が、チャンピオンに質問をする際に使用したメタ言語表現である。

5.4 「ショート・スピーチ」の進行、発表と質疑応答

「集中」では、第9週か第10週から、学習者は授業で短いスピーチを練習する機会が与えられ、最終回の授業で全員によるスピーチ大会が行われる。授業で練習する前に、学習者は作成した原稿を教師に提出し、添削を受ける。「ショート・スピーチ」の時間には、発表者だけではなく、司会者も学習者が交替で担当する。司会のことばは、教師が作成したもので、司会の際の参考として、学習者に配られている。また、スピーチの後で、質疑応答の時間も設けられており、聴衆としての教師、ゲスト、ボランティア、他の学習者が発表者に質問をする。こうした教室活動で、ほぼすべての学習者がメタ言語表現を使用しているが、ここでは、一人の学習者のスピーチを取り上げ、司会の進行からスピーチの発表、そして、質疑応答の全過程で使用されたメタ言語表現を示しておきたい。

表6 「ショート・スピーチ」で観察されたメタ言語表現

【資料10】 クラスⅢ 2012年11月28日 第10週	
[司会の進行]	
①今日は、ジョリンさんの、え？ ジョリンさんはスピーチを発表、発表し、ます。	
②タイトは、「私の一番好きなこと」です。	
[スピーチの発表]	
③これから、私の一番好きなことについてお話しします。	④どうして中国語を教えたいかという、(略)
⑤今日は私の一番好きなことについてお話ししました。	⑥以上です。
[司会の進行]	
⑦スピーチは終わりました。	⑧質問時間、はじめましょう。
[質疑応答]	
〈質問一〉(ボランティアの日本人大学院生より)	⑨質問です。
〈質問一に対する回答〉	⑩いい質問ですね。
〈質問二〉(司会者のクラスメート S306 より)	⑪司会が質問して失礼ですが、(略)
〈質問三〉(聴衆のクラスメート S302 より)	⑫もう一つ。(略)
[司会の進行]	
⑬質問ないようですから、スピーチを終わります。	

【資料10】において、まず、①②⑦⑧⑬は、司会の進行にかかわるメタ言語表現である。そして、スピーチの発表では、4つのメタ言語表現が使用されている。③は、導入部における聴衆とのやりとりを切り上げ、話題提示と言語行動の宣言・予告で、本題に入る例である。④は、疑問の形でこれから理由説明に入る予告をすることで、聴衆の思考を促し、スピーチの内容に惹きこむ例である。⑤は、話題を再び提示し、どのような言語行動をしたのかを示すことで、これまで話してきたことを切り上げ、スピーチの終了に移ることを予知させる例である。⑥は、正式に終了を告げる例である。また、質疑応答では、質問する側が使用したメタ言語表現は⑨⑩⑫であり、質問者が、⑨は学習支援のボランティア、⑩⑫はそれぞれ司会者と聴衆としてのクラスメートである。⑨は質問という言語行動の展開を予告する例、⑩は質問すべきではない司会者が質問する際に配慮と許しを求め、礼儀を示す例、⑫は二つ目の質問をする際の断わりをする例である。⑩は、発表者が質問された際に、質問内容に対して評価することで、表現検索の時間を稼ぐための例である。

5.5 他の教室活動や特別の教室活動ではない場面

「集中」では、他の教室活動や特別の教室活動ではない場面でも、以下のようなメタ言語表現が使用されている。

表7 特別の教室活動以外に観察されたメタ言語表現

【資料11】	クラスⅡ	2011年10月26日	第5週
これから、私たちの動詞を発表します。……。以上です。			
【資料12】	クラスⅢ	2012年12月19日	第13週
先生、質問があります。			

【資料11】は、学期の前半におけるメタ言語表現の初出であり、動詞の活用を練習するために、学習者がグループごとに好きな動詞の絵カードを選び、その活用形をクラスで発表する際に使用された例である。【資料12】は、学期の後半における授業で、教師に質問をする際に、学習者が自発的に使用したメタ言語表現の例である。

5.6 「教室の文脈」の提供

以上から分かるように、初級日本語のクラスにおいても、メタ言語表現が無理なく使えているのは、メタ言語表現が自然に使われる「教室の文脈」(川口2012)が提供されたためであろう。例えば、初対面のゲストに名前や仕事などを聞く前に、「失礼ですが、」と言い、二つ目の質問をする前に「すみません、もう一つ。」と付け加えることで、場や人間関係、質問の内容、タイミングにふさわしい丁寧な話し方の実践になる。また、発表の場で、これから行う言語行動を宣言・予告し、話題を提示し、言語行動の終了を告げるといふメタ言語表現が自然に使用できるようになる。さらに、司会の役目を学習者に与えることで、進行にかかわるメタ言語表現や、場の雰囲気、司会の立場にふさわしいメタ言語表現の実践の場も与えられる。メタ言語表現だけのために設けられた教室活動ではないのだが、このように、メタ言語表現が自然に出てきており、また、出てこざるを得ないような設定になっている。また、特別の教室活動でなくても、メタ言語表現の使用が観察されたりするため、初級でありながら、教室におけるメタ言語表現使用の必然性を察知できよう。

しかし、こうした教室活動を行えば、メタ言語表現が必ず使用されるという保証はない。教師がメタ言語表現とその使用文脈を意識的に捉え、適切なタイミングで導入し、適切な指導をしないと、メタ言語表現を使う機会が見逃されがちである。特に、初級の場合は、メタ言語表現の不使用は、問題視されないままになるおそれもある。これらの教室活動で、教師はどのようにメタ言語表現を導入し、指導しているのか。一方、学習者がどのようにメタ言語表現を学習し、使用しているのかについては、6で考察する。

6. メタ言語表現の教師の導入と指導、学習者の学習と使用

6.1 教師の導入と指導

「集中」では、教師はメタ言語表現を特別の表現として取り上げることなく、用語の説

明も、その機能や役割などの知識としての伝授も一切行っていない。また、あらかじめメタ言語表現を提供して、ドリル練習を経た応用練習のプロセスもない。では、教師はメタ言語表現をどのように導入し、どのような指導を行っているのだろうか。教師の導入と指導については、具体的な事例に基づいて検討すると、以下のような特徴がある。

第1は、メタ言語表現が必要とされる状況で、タイミングをつかみ、学習者に提供するということである。例えば、【事例1】においては、学習者が何も断らずに二つ目の質問をしたときに、教師が「そういう時は、二つ目ですから、『すみません、もう一つ。』と言いましょ。」と言って、メタ言語表現を導入している。波線部分の「それぞれ、それです、それです。」は教師がタイミングをつかんだことの現われだといえよう。また、【事例2】のように、司会の学習者が質問しようとしたときに、「～さん、司会が質問する時は、『すみません、司会が質問して失礼ですが、』」などと、教師がタイミングよくメタ言語表現を導入している場面がしばしば観察されている。

【事例1】

【事例2】

クラスⅢゲスト・セッション 2012.10.31 第6週	クラスⅢスピーチ 2012.11.28 第10週
T: はい、ほか。お名前は分かりました。 S312: 今日はなんで、しますか。しましたか。 T: ええと、今日は? 今日は? S312: 今日は、なん、なにで、来ますか。 T: なんで? S312: あ、い、行きましたか。あ、来ましたか。 T: <u>それぞれ、それです、それです。そういう時は、二つ目ですから、「すみません、もう一つ。」</u> S312: あ、すみません、もう? T: もう一つ。うん、もう一つ。 S312: <u>すみません、もう一つ。</u> T: どうぞ。 S312: 山田さんは、今日はなにで来ましたか。	S306: すみません。(みんな笑) T: <u>トクさん、トクさん、司会者が質問する時は、「すみません、司会が質問して失礼ですが、」。</u> S306: 質問、 T: 司会が質問して、失礼ですが、司会が、 S306: <u>司会が質問、</u> T: して、 S306: して、 T: 失礼ですが、 S306: <u>失礼ですが、</u> T: はい。 S306: 今、ジョリンさんは英語と中国語、上手です。日本語を勉強しています。後で、何の、あ、なにを勉強したいですか。 T: 何語、何語ね。 S306: 何語を勉強したいですか。

第2は、メタ言語表現の使用にかかわる要素としての場面、人間関係、話題などを重視し、待遇コミュニケーションの一環として、メタ言語表現を取り入れていることである。例えば、【事例3】のように、ゲストの名前を尋ねる際に、既習のメタ言語表現「失礼ですが、(お名前は?)」がある程度定着するようになったら、徐々に丁寧度を上げ、異なるメタ言語表現「お名前を教えてくださいませんか。」を導入するということが観察された。また、【事例4】のように、学習者が司会の立場で質問する際に、メタ言語表現の「もう一つ。」を使っているが、さらに、司会という立場により相応しく、より丁寧なメタ言語表現の「司会が質問して、すみませんが、」が教師によって導入されている。以上の例のように、人間関係や場について説明して練習するのではなく、ゲストをクラスに招き、学習者に司会を担当させて、学習者に実際にメタ言語表現の使用を体験させ、メタ言語表現の働きを意識させるところがポイントとなる。

【事例3】

【事例4】

クラスⅢゲスト・セッション 2012.11.21 第9週	クラスⅢピーチの司会 2013.01.09 第14週
<p>S312: 失礼ですが、お名前は？ T: ええとね、ちょっと待って、待って。ええとね、もう、「お名前は」はいいですけど、もう少し長くしましょう。お名前を？ (クラスメートの小声: 教えてください。) S312: 教えてください。 T: 教えてください？ (クラスメートの小声: いただけませんか。) S312: あ、いただけませんか。 G302: 私は中山と申します。</p>	<p>S310: でも、私、もう一つ。 T: はい、じゃ、司会が質問して、すみませんが、 S310: (聞き取れていない様子) T: 司会が質問して、すみませんが、 S310: 司会が、質問して、すみませんが、 T: どうぞ。(笑) S310: 王さん、日本へ、来てからもギターをひく？ ひる？ ひく？ ひきますか。 S307: ああ、今は、ギターは私の、そばにあります。でも、時間がありません。でも、(笑) sometimes。</p>

第3は、学習者がメタ言語表現の使用を意識化できるように働きかけていることである。これは次の二つの側面からなる。一つは、使用が意識されているが、日本語で正しく表現できない場合、それにふさわしい表現を提供することである。例えば、【事例5】において、「プレゼントにん yours、プレゼントにんは、I want to 紹介。」という学習者の発話から、使用が意識化したことを捉えて、適切なメタ言語表現を提供し、学習者の言いたいことが言えるように教師が手助けしている。もう一つは、学習者が既習のメタ言語表現の使用を忘れた場合、教師が直接に表現を与えるのではなく、問いかけたり、ヒントを与えたりすることで、学習者の使用意識が顕在化するように働きかけて、メタ言語表現の使用を促すことである。【事例6】において、学習者が2週間前に導入された「これから～について発表します。」を忘れて、使用意識が見られなかった場合、教師は直接学習者にメタ言語表現を投げ与えるのではなく、「今、何をしますか。」と何回も問いかけることによって、メタ言語表現の使用を意識化させるように工夫している。

【事例5】

【事例6】

クラスⅢチャンピオンのスピーチ 2012.11.21 第9週	クラスⅡ「個人化作文」の口頭発表 2011.11.09 第7週
<p>S312: これで。 T: はい、そうそうそう。これで。 S312: ちょっと待って。プレゼントにん yours、プレゼントにんは、I want to 紹介。 T: あ、OK. Yes, Yes. じゃあ、プレゼンターを、 S312: プレゼンターを、 T: 今日の、じゃ、今日の、 S312: 今日の、 T: プレゼンターを、 S312: プレゼンターを、 T: 紹介します。 S312: 紹介します。 T: はい、デリーさんです。 S312: デリーさんです。 T: はい、はい。(拍手)</p>	<p>S211: 皆さん、こんにちは。私は子どものとき、 T: あ、いま、何しますか。 S211: うん？ T: 今、何しますか。 S211: 今、何をしますか？ T: うん、何をしますか？ S211: 発表します。 T: うん、うん、そうそうそう。(爆笑) いまね、みなさん、こんにちは。私は子どものとき、だめ、だめ、だめ、これは小学生。皆さん大学生ですから。はい、これから何をしますか。 S211: あ、はい。これから発表します。私は子供のとき、母は私に歯を磨かないと、虫歯になると言いました。</p>

第4は、学習者のメタ言語表現の不使用や使用の誤りをそのまま流すのではなく、丁寧に拾って、適切なりアクションやフィードバック、フォローをすることで、定着するようなサポートをしているということである。【事例7】では、学習者の間違いを教師が訂正するのではなく、「ええ？」という反応を示すことで、学習者の自己訂正を促している。学習者が自己訂正を行った後、頷きながら肯定的なフィードバックを示している。【事例8】では、学習者が「お名前は？」と直接質問した後、教師は「お名前を？」というヒントを出して、より丁寧な聞き方を引き出そうとしている。さらに、学習者の使用に「おお」と驚きを示したり、「すごい」「きれい」と褒めたり、学習者の発話を繰り返したりして、フィードバックをしている。こうしたサポートにより、学習者の自発的な使用を促すことを可能にしている。

【事例7】

【事例8】

クラスⅢスピーチの司会 2013.01.09 第14週	クラスⅢ ゲスト・セッション 2012.11.21 第9週
S310：質問ありますか。ない、質問、ないよう ですから、うん、これで、スピーチを、終わ りました。 T：ええ？ S310：終わります。 T：はい。(頷きながらにこにこ笑う)	S314：はじめまして。私はティル、です。 G303：はじめまして。 S314：お名前は？ T：ええと、お名前を？ もう一度、お名前を？ (笑)お名前を？ お名前を？ S314：お名前を伺っても、 T：おお、 S314：よろしい？ でしょうか？ T：おお、すごい。すごい。おお、きれい。お 名前を伺ってもよろしいでしょうか。きれい です。 G303：あ、田口と申します。

6.2 学習者の学習と使用

教師の導入と指導を受けて、学習者がどのようにメタ言語表現を学習しているのかについて検討すると、以下の4点にまとめられる。

第1に、【事例1】【事例2】のように、メタ言語表現が必要とされる状況で教師による導入を受け、学習者はその場で適切にメタ言語表現が使えるようになり、しかも、その際に学習困難は観察されなかった。また、【表7】の【資料11】は、クラスⅡにおけるメタ言語表現の初出であるため、学習者にショート・インタビューを行った。

【ショート・インタビュー S204】

第一次学。我一听就知道了，他就是讲接下来做什么嘛。在这种语境下，大概就是这个意思嘛。然后，他说“ハッピーウ”，ハッピーウ的话，我们也知道就是汉字，直接就是“发表”。在这个语境下，在这个条件下，我们大概就知道。因为我们知道我们要去讲我们找到的动词嘛。我觉得有必要吧。因为这个相当于我们在中国，任何场合你得有个叫什么“开场白”嘛。这个叫开场白嘛。“大家好，接下来我要做什么什么”，国内做任何报告也是要这样子啊。你上来就得说，接下来是关于什么的报告。就相当于开场白嘛，然后就进入正题。

【日本語要約】

初めて習った。聴いてすぐに分かった。これから何をするのかについて話しているのだろう。このような文脈で、大体分かる。ハッピーウという発音を聞いて、すぐに漢字が分かった。見つかつ

た動詞を発表するというのが分かっているからだ。必要だろうと思う。中国でいかなる場面で前口上、前置きがなければならぬのと同じである。特に、プレゼンテーションをするとき、最初からこれから何々についてのプレゼンですと言わなければならない。「みなさん、こんにちは。これから私は～をします」と言ってから、本題に入る。

以上の語りによると、「発表します。」は初出であるが、文脈による意味の推測と発音による漢字の連想ですぐに分かったという。初級学習者でも、メタ言語表現の使用される文脈によって、その意味を推測し、表現を獲得できる。また、この学習者は、「発表します。」というメタ言語表現の必要性を肯定的に評価し、中国語の「开场白」（前口上、前置き）に当たるため、それほど違和感がなく、特にプレゼンテーションなどに必要であると語っており、母語の感覚や言語生活上の経験が日本語のメタ言語表現の理解と学習にも大いに役立つことが分かる。従って、適切な教室活動のデザインとメタ言語表現が必要とされる状況での導入は、メタ言語表現に対する学習者の推測や意味理解に大いに役立つものだといえよう。同時に、学習者の母語の感覚と言語生活の経験を活用すれば、日本語のメタ言語表現は理解しにくいものではないということが分かる。

第2に、学習者に使用意識がない場合は、【事例1】【事例2】のような教師の導入、または、【事例6】【事例8】のような教師の問いかけによる刺激が必要になる。一方、【事例5】のように、学習者はメタ言語表現の使用意識を持っているが、ただ日本語の該当する表現が分からず、教師の助けを必要とする場合もあり、教師の助けから表現意図に合ったメタ言語表現を得て、言いたいことが言えるようになっている。

第3に、教師のヒントや問いかけによる刺激を受けて、【事例7】【事例8】のように、学習者がすぐに問題の所在に気づく場合もあれば、【事例3】【事例6】のように、すぐには思い出せない、または、気づかない場合もある。その際、【事例3】のように、他の学習者も小声で表現を当ててみたり、正しい表現を言って助けてやったりするという、学習者間の助け合いの様子もしばしば見られる。

第4に、教師の指導を受けた学習者でなくても、メタ言語表現の重要性に気づき、意識化に繋がったという例も観察されている。例えば、次の【事例9】では、作文の口頭発表で、学習者S214は、【事例6】における学生S211に対する教師の指導を見て、「これから私の作文を発表します。」というメタ言語表現の重要性を十分に意識して、事前に手の平に「発表（はっぴょう）」と書いて教壇に上がった。授業の合間を利用して、本人にショート・インタビューをしたところ、クラスメートが使っているのを、自分も使いたいが、忘れるとまずいので、手の平に書いておいたと語り、また、メタ言語表現の重要性、母語での使用習慣、意識的な学習にも言及した。

【事例9】

クラスⅡ「個人化作文」の口頭発表 2011.11.09 第7週

（【事例6】との間に7人の発表が挟まれている）

S214：これから、私のはつ、（掌を見ながら）発表です。（クラスで爆笑）1年前、私の母は私に、勉強しないと、彼女が作って、作ってだめと言いました。

T：あ、はいはい。なるほど、なるほど。

[ショート・インタビュー S214]

因为大家都用，我怕忘记。这个很重要。因为学习日语的就是要不断地学习、不断地加深、不断地记忆。想用，但是怕忘记。汉语当中演讲的话，有说这个的习惯。

[日本語要約]

みんな使っているし、忘れてしまうとまずいから。とても重要。日本語の勉強は絶えず学び、絶えず深め、絶えず覚えなないといけない。使いたいけど、忘れるとまずい。中国語でスピーチするときも、これを言う習慣がある。

学習者のメタ言語表現の使用については、全体的に見ると、教師の導入と指導による使用から自発的な使用へと変わり、定着する様子が見られた。

まず、クラスⅢを例に、観察されたメタ言語表現を1)「教師の導入による使用」、2)「自発的ではあるが、教師の指導や訂正が入る使用」、3)「自発的な使用」に分類して、時間の経過に沿って、【表8】を作成した。なお、スピーチのある日とない日では、メタ言語表現の使用量が大きく異なるため、スピーチで使用されたメタ言語表現は【表8】に入れずに、後の【表10】で個別に考察する。【表8】に示す通り、その日その日の授業内容や教室活動が異なるため、はっきりした傾向は出ていないが、全体的に、「教師の導入や指導による使用」から「自発的な使用」に変わり、定着する様子が見られた。

表8 クラスⅢにおけるメタ言語表現の使用状況

	6週	7週	8週	9週	10週	11週	12週	13週	14週	15週	合計
1)	3	0	0	0	1	3	1	0	1	4	13
2)	0	4	1	9	3	0	2	0	1	0	20
3)	1	2	2	5	4	1	3	1	5	2	26

次に、クラスⅢにおいて、最も定着する様子を見せているメタ言語表現として、「もう一つ。」「失礼ですが、」と「質問があります。」がある。「もう一つ。」を例に、時系列でデータを整理すると、【表9】のようになる。

表9 クラスⅢにおけるメタ言語表現「もう一つ。」の使用状況

データ番号	週	使用状況	文字化資料
K301		1)	【事例1】
K302	6	1)	[ゲスト・セッション] (出身地について聞いた後) S309: 中国に、行った、ことが、ありますか。 T: ああ、ちょっと待って。それ、一つ、一つの質問ね。一つの質問終わりましたね。新しい質問、「すみません」、 S309: あっ、すみません。もう、もう一つ。 T: もう一つ、もう一つ。 S309: あ、あ、もう一つ。あ、中国に行ったことがありますか。 G304: あります。香港とアモイです。

K305	6	3)	[ゲスト・セッション] (趣味について聞いた後) S309: 田中さん、もう一つ。あ、田中さん、俳句を、つくりますか。 G305: 月に、一回、句会があります。俳句の、会で、句会です。句会があったら、そこで、若い人ばかりなんですけど、句会があるので、ぜひ、興味があったら、いらしてください。
K307	7	2)	[ゲスト・セッション] (中国語ができるかどうかについて聞いた後) S309: あ、もういち、もん。 T: <u>もう、もう一つ?</u> S309: <u>もう一つ。</u> T: <u>もう一つお願いします。</u> はい。 S309: <u>もう一つお願いします。</u> あ、一番好きな中国語の歌、何ですか。
K312	8	2)	[ゲスト・セッション] (名前について聞いた後) S302: あ、 <u>もう一つ。</u> T: うん? <u>あ、もう一つお願いします。</u> S302: はい。 <u>もう一つお願いします。</u> お国はどちらですか。 G307: トルコです。
K313		3)	[ゲスト・セッション] (専門について聞いた後) S309: うん、 <u>もう一つ。</u> どのくらい、日本に、住んでいますか。 G307: まだ、3ヶ月です。
K329	10	3)	[スピーチ後の質問時間] S302: すみません。あ、どのランゲージは、一番、簡単ですか。 L: うん、中国語、もちろん。そうではありませんか。 S302: うん、い、あ、はい。あ、 <u>もう一つ。</u> L: うん、はい。 S302: どのランゲージは二番簡単ですか。 L: うん、英語?
K332	11	3)	[ゲスト・セッション] (クラスに来た理由について聞いた後) S309: じゃあ、 <u>もう一つ。</u> (人差し指を出しながら、小声で) どうして、日本語を、教えたいですか。今、あ、地理と、あ、歴史を、教えています。
K337	12	3)	[ゲスト・セッション] (仕事について聞いた後) S309: ああ、じゃあ、 <u>もう一つ。</u> (小声で) ああ、どちらで、日本語を、教えて、いらっしゃいます、か。 G308: はい、これも、遠藤さんと同じで千葉県にある〇〇大学で、教えています。
K338	14	3)	【事例4】

【表9】で示す通り、続けて質問をする際の「もう一つ。」は、第6週目のK301とK302で初めて導入された1)「教師の導入による使用」である。同じ日の授業のK305で、早くも3)「自発的な使用」が観察された。第7週のK307と第8週のK312は、2)「自発的ではあるが、教師の指導や訂正が入る使用」である。K307では、学習者は「もういち、もん。」という発話から、メタ言語表現の「もう一つ。」の使用意識は持っているが、正しく表現できず、教師の手助けを必要としていることが分かる。K313からK338までは、すべて3)「自発的な使用」になっており、「もう一つ。」の定着度を反映している。

また、特別の教室活動でもなく、教師の導入や指導もなく、学習者の自発的な使用が観察されたことから、メタ言語表現の使用が意識化され、使用の習慣が形成されていること

が分かる。【事例 10】と【事例 11】は学期末の授業中に、学習者が質問するときに、メタ言語表現を使用した例である。

【事例 10】	【事例 11】
クラスⅢ 2012 年 12 月 19 日 第 13 週	クラスⅢ 2013 年 01 月 09 日 (水) 第 14 週
S315: 先生、質問があります。 T: はい、はい。 S315: この部分、なに? なに、なに、新しい? T: はい、新しい。はい、はい。	S315: 先生、文法について。 T: はい。 S315: そのスピーチの文法はどこですか。 T: ええ、 S315: あの新しい文法、ファイナルスピーチの文法? T: これはですね。(以降省略)

「集中」では、学期最後の日に、一学期の成果物として、「最終スピーチ」が行われるのが慣例となっている。学習者のスピーチでは、下記の【表 10】で示されているように、学習者のほとんどがメタ言語表現を使用している。

表 10 最終スピーチで使用されたメタ言語表現 (クラス I・II・III)

学習者	スピーチで使用されたメタ言語表現 ⁶
クラス I	
S101	①これから、スピーチを話します。②始めます。③ドイツのクリスマスについてお話しします。④以上です。
S102	①じゃあ、ふるいのを発表します。②日光の旅行、これから発表します。③(わたしはともだちとにっこうへいきました。)きょう、そのことについておはなしします。
S103	①今日はわたしのくに、韓国のソウルの一日旅行についてはなしします。②第一は、③つぎは、④第三は、⑤最後に、⑥以上です。
S104	なし
S105	①これから、発表します。②私にほんにきてしたことをかきます。③まず、④そして、⑤また、⑥以上です。
S108	①これから私の発表を話します。②以上です。
S109	①小学校へ行くまえに、このクラスで、これからちょっとブラジルのカーニバルについて、話そうと思います。
S110	①これから、私の発表をします。②これから、ハッピーの話です。③以上、私の生活です。④以上です。
S111	①(私の学部時代はマカオで過ごして、)今日のスピーチにマカオについてご紹介したいです。
S112	①まずふるいまちです。②つぎにパートーンです。③最後にピーピーします。④以上です。
S113	①私はソウルのしぜんとでんとうてきなたてものについておはなしします。②まず、③さいしょにしょうかいするのは、とまるどころです。④一つだけ例をあげると、⑤さいごに、私かならず行きたいところをしょうかいします。⑥以上です。
S114	なし
S115	①これから発表します。②終わりました。

クラスⅡ	
S201	①どうしてかという、②書くだけでは、その気分を全部完璧に説明できないと思います。
S202	①私のタイトルは「韓国の芸能人」です。②以上です。
S203	なし
S204	①これから私の大好きな所について、お話ししたいと思います。
S205	①私はみなさんにロマンチックのバリ案内をするつもりです。②さいごは、私の日本の経験です。③とにかく、私はみなさんすべてにかんしゃもうしあげたいとおもいます。
S206	なし
S207	①今日はスカウトについて話したいと思います。②今日はスカウトについて話しました。③以上です。④ご質問をよろしくお願ひします。
S208	なし
S209	①私の日本生活について発表します。
S210	①参加したばかりですから、ここで、皆さんに紹介させていただきます。②以上です。
S211	①今日はダイエットについてお話ししたいと思います。②まず、聞いてみます。③今日は、私のダイエットの経験についてお話ししました。④これで私のスピーチを終わります。
S212	①今日は私の一番好きな都市についてお話ししたいと思います。
S213	なし
S214	①すべては大学に入ってからのはなしです。
S215	①今日、ドラえもんをぜひ紹介したいと思います。②ドラえもんといえば、③これから紹介しましょう。④発表の時間が少ないです。でも、そして、一番有名な道具を紹介します。⑤ここまで私の発表は終わります。
S216	①これから発表します。②以上です。
クラスⅢ	
S301	①今日、私の人生について発表します。②私の発表は以上です。
S302	①今日、私は食べ物のことをみなさんに話そうと思います。②終わり。
S303	①以上です。
S304	①これは、わたしの発表です。②アイルランドと私のアイルランド生活について発表します。③以上です。
S305	①それで、今日は子供の時から今までの大事な本、5冊について話したいと思います。
S306	なし
S307	①どうしてかという、
S308	①これから、私のスピーチをします。②私のスピーチを終わりました。
S309	①これから私の夢についてお話しします。②どうして中国語を教えたいかという、③今日は私の夢についてお話ししました。④以上です。
S310	なし
S311	①以上です。
S312	①でも、本日、私の趣味について話します。②本日、皆さんに基本的なビリヤードの方法を紹介します。③9球について説明すると、④以上です。
S313	①以上です。

S314	なし
S315	①今日は私の好きなイベントについて、発表したいです。②以上です。
S316	①今日は〇〇大学剣道同好会を紹介したいと思います。②まず、
S317	①私は私にとって、とても大切な人を紹介したいと思います。
欠席	(クラスⅠ) S106・S107 (クラスⅡ) S217・S218 (クラスⅢ) なし

学習者のスピーチにおいて、主に使用されているのは、「話題提示」「予告」「話題提示+予告」「サブポイント提示」「終了表示」である。中には、「話題提示」で、S101 ③やS103 ①のように、最初からスピーチ全体の「話題提示」をするものもあれば、S309 ①やS312 ①のように、開始部から本題に切り替える際に、「話題提示」をするものや、S113 ③⑤やS312 ②③のように、スピーチの部分的な話題を提示するものもある。学習者は、習得したメタ言語表現を用い、それぞれの使用意識に合った表現の産出をしていることが分かる。

6.3 教師と学習者の相互作用

6.1で教師の導入と指導、6.2で学習者の学習と使用をそれぞれ考察したが、教師と学習者の相互作用、及び指導と学習の連動を総合的に捉えて、まとめたのが【表 11】である。

表 11 教師と学習者の相互作用&指導と学習の連動

	①学習者 ←	→ ②教師 ←	→ ③学習者	事例
A	メタ言語表現が必要とされる状況で、使わずに話をしている場合。	タイミングをつかみ、状況にふさわしいメタ言語表現を学習者に提供する。	教師の導入により、その場で使用できるようになる。	【1】 【2】
B	自らメタ言語表現の使用意識があるが、日本語で正しく表現できず、教師の手助けを必要とする場合。	使用意識の表れをキャッチして、学習者の必要とされるメタ言語表現を与えて、手助けをする。	意図に合ったメタ言語表現で、言いたいことが言えるようになる。	【5】
C	すでに導入されたメタ言語表現の使用を忘れた場合。	直接表現を与えるのではなく、ヒントや問いかけで使用を促し、意識化に繋げる。	脳が活性化され、表現を検索し、思い出す。	【6】
D	メタ言語表現使用にミスがあった場合。	ミスしたところに焦点を当てて、自己訂正を促す。	ミスに気づき、自己訂正を行う。	【7】
E	努力してメタ言語表現を使用できるようになった場合。	褒めたりして、達成感を与え、記憶を強化する。	モチベーション上昇、次の自発的な使用に繋がる。	【8】
F	メタ言語表現の使用にかかわる場や人間関係まで気を配る余裕がない場合。	待遇意識の養成を重視し、場、人間関係に相応しい話し方を学習者に提供する。	場や人間関係などの待遇意識が顕在化され、メタ言語表現の使用に心がける。	【2】 【3】 【4】
G	指導を受けている学習者はすぐに思い出せない時、学習者間の助け合いも見られる。			【3】
H	教師の指導を受けた本人でなくても、メタ言語表現の重要性に気づき、意識化に繋がる。			【9】
I	特別の教室活動でなくても、学習者が状況にふさわしいメタ言語表現を自発的に使用することができ、教室外で応用の可能性も考えられる。			【10】 【11】

A・B・Cは、教師がメタ言語表現の使用の意識化と習慣の形成に力を注ぎ、学習者の状況に合わせた導入と指導を行ったことに関する項目である。Aのように、メタ言語表現が必要とされる状況で学習者が使用していない場合に、タイミングよく導入したり、Bのように、使用意識があるが正しく表現できない場合に、必要な手助けをしたり、Cのように、知っているはずだが、使用を忘れた場合、ヒントや問いかけで使用を促したりしている。こうした教師のサポートで、学習者は必要とされるが知らないメタ言語表現 (A)、使いたいが、正しく使えないメタ言語表現 (B)、知っているが、使用を忘れたメタ言語表現 (C) が、その場で使えるようになるだけでなく、使用が意識化し、使用の習慣も形成されていく。

DとEは、学習者の産出に対する教師のサポートについての項目である。教師は学習者の産出をそのまま受け流すのではなく、学習者が誤った場合に自己訂正を促したり、学習者が努力して使えるようになった場合は褒めたりする。学習者は、教師のこうした適切なリアクションやフィードバックによって、文脈に相応しいメタ言語表現の産出ができるようになり、熟達度が上がり、徐々に使用が定着している。

Fは、メタ言語表現の使用にかかわる待遇意識の養成についての項目である。「ゲスト・セッション」や「チャンピオンのスピーチ」などの教室活動においては、場と人間関係に相応しい丁寧で改まった話し方が要求される。教師は、学習者の様子を見て、少し余裕が出てきたら、丁寧度を上げたり、立場により相応しいメタ言語表現を提供したりすることで、待遇意識の養成に力を入れている。一方、学習者は、こうした指導を受け、もともと母語で持っているはずの待遇意識が顕在化され、場や人間関係により相応しいメタ言語表現を学習していく様子が見られる。

G・H・Iは、教師の導入と指導によってもたらされた副産物として、直接その場で指導を受けた本人以外にも、学習者間で助け合い、メタ言語表現の意識化ができたことを示している。さらに、教室活動と関係のないところでの自発的な使用も見られる。

7. 日本語教育への提言と今後の課題

本調査では、「教室活動」「教師」「学習者」の3点を総合的に捉え、日本語初級クラスにおけるメタ言語表現の指導と学習を考察し、初級日本語教育にメタ言語表現を取り入れる可能性を具体例とともに示した。メタ言語表現は、中・上級レベルになって、いきなり長文で導入するのではなく、初級レベルでも必要とされる場合があるため、それを逃さずに、難しくない表現から少しずつ導入することが効果的である。メタ言語表現は、言語知識というよりは、一種の言語習慣であるため、学習者も初級からメタ言語表現を使用する実践を重ねていけば、習慣形成に繋ぐことが期待される。本稿の考察を踏まえた日本語教育への提案は、以下の5点である。

- (1) メタ言語表現の使用には、人間関係や場などの要素が大きくかわるため、待遇コミュニケーション教育の一環として、初級から少しずつ日本語教育に取り入れる必要がある。
- (2) メタ言語表現という用語や概念の説明、知識の伝達、表現リストの提供、メタ言語表

- 現のためのトレーニングよりも、どのような文脈で使われるのかという体験や、使用の意識化と使用習慣の形成のほうがより重要であり、より望ましい教育方法である。
- (3) 教室という文脈を十分に利用し、メタ言語表現の使用が必要とされる教室活動のデザインや教室環境を整っておく必要がある。それがメタ言語表現を自然に導入し、学習者の理解と学習を助け、無理なく使用するための土台作りとなる。
 - (4) 教師は、メタ言語表現が必要とされる状況で、タイミングを逃さずに導入し、学習者の使用意識と表現の産出を丁寧に取り扱い、定着へ繋げていくサポートをすべきであろう。
 - (5) 学習者は、与えられた文脈と母語の感覚を手がかりにメタ言語表現を理解し、教師の導入と指導で使用意識が顕在化し、学習者同士で助け合いつつ、それぞれメタ言語表現を自分自身の文脈に内在化して、定着した使用をしていくようである。

以上、(1) から (4) までのポイントを統括するのは、教師の意識であると言っても過言ではない。川口 (2012) は、以下のように論じている。

「ショート・スピーチではなく、通常の作文やグループワークの結果をクラスで発表させるときにも、『これから、……について発表します』『まず、始めに……。次に、……』『以上です』のような『メタ言語表現』を必ず使うように指示し、『人の前で発表する＝聞き手に分かりやすく提示する』ということに対する『待遇コミュニケーション』上の感覚を養っている。」(川口 2012 : 42)

「教師に自発的に質問したり、コメントを言いたかったりしたときに、ただ手を挙げていきなり話し出すのではなく、『先生、質問があります』『先生、ちょっとコメント、よろしいですか』と発言してから発話することは、待遇上重要なことである。これも『教室の文脈』ではよく起こることなので、意識に上がらせておく必要がある。」(川口 2012 : 47)

こうした論述から、教師が意識的にメタ言語表現を待遇コミュニケーション教育の一環として、初級日本語教育に取り入れ、教室の文脈を生かし、適切な教室活動をデザインし、意識の養成を重視することの重要性が分かる。しかも、これらのポイントが有機的に相関関係を持ちつつ、その過程全体が学びの場を提供していることも読み取れるのである。

本稿の議論の対象は教室で観察されたことに止め、教師と学習者が初級におけるメタ言語表現の教育をそれぞれどのように捉えているのかという意識の面には触れなかった。特に、学習者が教室活動、教師の導入と指導、メタ言語表現の必要性和難易度をどう受け止めているのか、メタ言語表現の使用にかかわる人間関係や場に対する待遇意識をどのように持っているのか、母語におけるメタ言語表現とのリンクができていのかどうかについて考察しなければならない。こうした教師と学習者の意識に関しては、筆者が行った教師インタビューと学習者 (17名) インタビューの結果を踏まえ、今後、稿を改めて分析し、考察したい。

謝 辞

本研究を進めるにあたり、長期間の参与観察を快くお引き受けいただきました3クラスの先生と学習者の皆様方に心より感謝いたします。また、丁寧かつ熱心なご指導と激励を下さいました川口義一先生、貴重なご助言を承りました佐久間まゆみ先生、及び査読の先生方に深く御礼申し上げます。

注

- 1 メタ言語表現の分類が本研究の目的ではないため、あくまでも調査で観察されたメタ言語表現を見やすく提示するための整理に過ぎないのである。
- 2 動詞の活用の練習で、学習者がグループごとに好きな動詞の絵カードを選び、その活用形をクラスで発表する際に使用された例である。詳細については、【資料11】を参照されたい。
- 3 日本語が使えていなかったとしても、補正して、配慮を示そうという意識が表れているため、使用例として認定し、考察の対象とする。
- 4 メタ言語表現の「文脈展開機能」については、李（2013）で詳しく分析している。
- 5 Sは学習者、Gはゲスト、Tは教師を表している。なお、人名はすべて仮名である。
- 6 表記は学習者の提出したスピーチ原稿を載せた冊子のままになっている。

参考文献

- 大塚容子（2002）「ディベートにおけるメタ言語表現—日本語学習者の場合—」『岐阜聖徳学園大学紀要〈外国語学部編〉』41、pp. 57-67、岐阜聖徳学園大学
- 金城尚美・玉城あゆみ・中西朝子（2007）「日本語非母語話者のメタ言語行動表現に関する一考察—配慮という観点から—」『琉球大学留学生センター紀要留学生教育』4、pp. 19-41、琉球大学留学生センター
- 川口義一（2005a）「文法はいかにして会話に近づくか—「働きかける表現」と「語る表現」のための指導—」『フランス日本語教育』2、pp. 110-121、フランス日本語教育会
- （2005b）「表現教育への道程—「語る表現」はいかにして生まれたか—」『講座日本語教育』41、pp. 1-17、早稲田大学日本語教育研究センター
- （2011）「初級日本語教室における日本語能力—その認知的側面・情意的側面・社会的側面—」『早稲田日本語教育』9、pp. 33-40、早稲田大学日本語教育研究科
- （2012）「初級日本語課程の「教室の文脈」における「待遇コミュニケーション教育」」『早稲田日本語教育』11、pp. 37-52、早稲田大学日本語教育研究科
- 西條美紀（1996）「ディベートにおけるメタ言語」『日本語学』15、pp. 68-75、明治書院
- （1999）『談話におけるメタ言語の役割』風間書房
- 佐久間まゆみ（2002）「接続詞・指示詞と文連鎖」野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則『複文と談話』pp. 119-189、岩波書店
- 澤邊裕子（2001）「講義に用いられるメタ言語表現の一研究—日本語学習者と日本語母語話者の講義聴解との関係—」『小出記念日本語教育研究会論文集』9、pp. 7-23、小出記念日本語教育研究会
- 杉戸清樹（1983）「待遇表現としての言語行動—「注釈」という視点—」『日本語学』2、pp. 32-42、明治書院
- （2008）「言語活動についての言語活動を」『中等教育資料』5月号「言語活動を重視した指導の充実」特集、pp. 10-13、文部科学省教育課程課
- 関口律子（2005）「留学生の講義理解におけるメタ言語の役割」『拓殖大学日本語紀要』15、pp. 39-60、

拓殖大学国際部

- (2006) 「学部留学生のためのアジャнкт・クラスの試み—枠組みとコース設計を中心に」『拓殖大学日本語紀要』16、pp. 13-30、拓殖大学国際部
- 藤家智子 (2004) 「上級日本語学習者における口頭発表についての問題点」『大阪外国語大学留学生日本語教育センター授業研究』2、pp. 1-20、大阪外国語大学留学生日本語教育センター
- 古別府ひづる (1993) 「専門的内容における口頭発表のメタ言語表現」『表現研究』59、pp. 12-22、表現学会
- (1994) 「研究報告における口頭発表のメタ言語表現—日本人と留学生との比較—」『平成6年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp. 103-108、日本語教育学会
- 李 婷 (2013) 「メタ言語表現の文脈展開機能」『早稲田日本語研究』22、pp. 1-12、早稲田大学日本語学会